

二月十八日、私は劇作家の迫間健氏の招請を受けて、大阪「新歌舞伎座」で、小林旭主演の「馬喰一代」を観賞する機会にめぐまれた。「馬喰一代」は、故中山正男氏の原作であり、かつて映画化もされた名作である。迫間氏によると、「馬喰一代の主人公こそは私の父であり、そ

の子大平とは私のことである」と原

作者は語っているという。この劇のサブタイトルを、——縁・絆・そして愛——としたのは、いうまでもなく迫間氏である。ここで私は、迫間氏とのかかわりにふれなければならぬ。私はこの舞台で、「大平」の小学校時代の担任訓導「水田チエ」を、目がしらが熱くなる思い

## 縁・絆・そして愛

水田 潤

で見た。「水田チエ」とは、私の母である。母は地元の小学校の教師であった。そして、そのある時期に、母は迫間少年の担任であった。迫間氏によると、それは、小学校一年生のわずか二学期間であったという。母は昭和三十三年にガンで他界した。私はそれまでの

期間、同氏と母の文通が近づいていたことを知っている。しか

し、母は迫間氏のことは何も私には話してはいなかった。「馬喰一代」公演を機会に、同氏は、ことば少なな「チエ先生は、私には一生忘れられない先生でした」と、語ってくれただけである。公演の間に、私は母を演じていたいた女優田中綾子さんを楽屋に訪ねた。

田中さんは、「きょうは、先生の名刺を襟にはさんで、いっしょうけんめいに、チエ先生になりきりました」と、にこやかに笑いかけ

てくれた。実は迫間氏の好意で、事前に私の名刺は彼女に届けてあった。私はまた胸が熱くなった。二月十八日、それは偶然にも私の誕生日でもあった。ちなみに言うなら、原作には小学校訓導の登場する場面はない。これは迫間氏による脚色である。——縁・絆・そして愛——のことばに、同氏のあ

る感懐が重層していたのかもしれない。私じしんも教師生活は長い。「卒業をしても、母校のことは忘れずに、ときには便りをください」ということばを言う機会も多い。たしかに学生たちの多くとは、縁と絆とはあった。しかし、そのひとりひとりに、どれだけ「愛」をそそぐことができたか。迫間氏のご好意にかかわって、ここにこのことを思う。